

豊臣秀吉と屋久杉

屋久島の象徴的な杉である屋久杉が全国的な名声を得たのは、16 世紀後半に豊臣秀吉（1536-1598）がこの島に良い杉があることを知り、京都の寺院の本堂建設に屋久杉の使用を命じたことが始まりとされています。

秀吉が屋久杉に目をつける

長きにわたる内戦の末、十六世紀後半に秀吉はその支配の下に日本を統一しました。1586 年四月、彼は京都の方広寺に大仏殿を建てるための杉と檜の搜索を命じました。当時九州の大半を支配していた島津家は秀吉のライバルであったため、当初は命令に従いませんでした。しかし、1587 年には秀吉が島津氏を破り、当主の島津義久(1533-1611)は屋久杉の貢ぎ物を送るようにと命じられました。

秀吉は側近であった大名石田三成（1560-1600）に、家老の伊集院忠棟（没 1599 年）と島津忠長（1551-1610）に屋久島に行って木材の調査をさせるよう求めました。二人が島民の案内のもと、数本の木を調査したところ、屋久杉は建設材料に適した、美しい節を持つ高品質で耐久性のある木材であることがわかりました。この調査は 1595 年に義久と兄弟の義弘(1535-1619)が出した布告の中で言及されており、そこには「大仏本堂のための木材調査で記録されてた木は、そのままにしておくこと」と記されています。

これだけの大きさの木を運ぶのは物流的にも金銭的にも難しい課題であったため、秀吉が命じた屋久杉が最終的に京都に到着できたのかどうかは不明です。1592 年に秀吉のもとに軍を配備したことで、島津家には屋久島から木材を運ぶ船が不足し、またおそらく経済力も板や柱に使う加工木材を京都に送るだけしか残っていなかったでしょう。この話は未だ解明されていません。

ウィルソンの株

寺院のために伐採された屋久杉のうちの一本は、1914 年にその切り株を発見し世界に紹介した、イギリスのプラントハンター兼植物学者、アーネスト・ヘンリー・ウィルソン（1876-1930）の名を付けられた、ウィルソン株であったと考えられています。1917 年にウィルソンに出会った日本の植物学者、田代善太郎(1872-1947)は、1918 年から 1923 年の間に屋久島に初めて調査のため訪れ、1926 年の報告書の中で、この切り株の再生状態はこの木が十八世紀初頭に伐採されたことを示唆していたと記しました。

この切り株は、屋久島国立公園の特別保護区域内にある大株歩道沿い、標高 1,030 メートルのところにあります。原木は樹齢 2,000 年以上であったであろうと推定されています。切り株の直径は四メートルを超えています。中空の内部には小さな泉があり、山の神である彦火火出見命、木の神である久久能智神、そして山と海の神である大山祇命を祀る木魂神社があります。宮之浦のシーサイドホテルの敷地内にはウィルソン株のレプリカがあり、訪問客は実際の大きさの切り株を知ることができます。

